



2018.6  
vol.210



## コドモであり続けること

学校長 飯山 等

私の好きな詩人・谷川俊太郎さんに『質問箱』（ほぼ日出版・2007年刊）という本があります。さまざまな一般の人からの質問に谷川さんが答えるという、その一問一答を形にしたものです。

2018年1月に2冊目が出て、その最後はこんな質問です。「質問：人は何をしに生まれてくるのですか。」そして、谷川さんの答えは、「答え：人は何かをしに／生まれてくるわけではありません。／生きているのが楽しくて／幸せだと思えるように生きる、／そのために生まれて、／生きているんです。」

私たちは今、たくさん大好きな食べ物があります。それを食べているときは楽しいし幸せだと感じます。でも、それは始めからそうであったわけではありません。むしろ、口に入れられるのをいやがってムツとつくんだことでしょう。それでも、お母さんやお家のひとが、「おいしいよ、おいしいねえ」と私たちに何度も話しかけながら口にはこんでくれたのです。そうしてやがて、それを「おいしい!」と感じる私になったのです。Wonderful(ワンダフル)は、「すばらしい、すてきだ、最高だ」という意味ですね。この語はwonder+ful(いっぱい)からできています。このwonderの語は、辞書でははじめの方に、「(好奇心・不安・疑いを持って)～かしらと思う」という意味が載っています。私たちの人生でも、それまでの経験では思い議ることのできない事物に直面したとき、不可解、不可思議として遠くに追い遣ろうとしたり、奇妙だと受け容れるのを拒否し、いっしょにいたくないと不安な気持ちになります。私たちは生きてゆく過程のなかで、このような思いを数知れないほど重ねてきました。そうして今までの私に、今までの

お気に入りの留まってしまう。しかし、ワンダーがいっぱいになる、意味を把握して落ち着こうとするころの破れの向こうに、世界が大きな《たまわり》として開顕される。意味を了解しようとする私が転じて、Wonderful!、としか言い表せないこととして。

司馬遼太郎さんの『風塵抄』の中の「高貴なコドモ」と題する文章に、「人間はいくつになっても、精神のなかにゆたかなコドモを胎感していなければならない。でなければ、精神のなかになんの楽しみも生まれぬはずである。いい音楽を聞いて感動するのは自分のなかのオトナの部分ではなく、コドモの部分なのである。また小学生のたれもが、担任の先生を尊敬するように、他者の偉大さを感じるのも、コドモの部分である。(略)人は終生、その精神のなかにコドモをもち続けている。ただし、よほど大切に育てないと、年配になって消えてしまう。(略)ここでいうコドモとは、成人仲間で見られる子供っぽさとか幼児性とかいうことではない。いくつになっても、他人に甘えっぱなしの成人がいる。それはコドモが豊富ということではなく、オトナとしての義務や節度、あるいはオトナとして最低限必要なにごとから逃避したいための疑似コドモにすぎない。本来コドモはりりしいものである」、とあります。世界を、意味や当為や正義が力で律する筋張ったものにしたたり、生きることの重心を、いかに巧みにと懸念・腐心したりするのではなく、在ることをwonderful!として豊かに感じる。そのような《和らかな私》としてこの《世界》と《私たち》を経験するコドモであり続けたいと思います。「私たちはいつも子供に還りたい還りたいと思ひながらも、なかなか子供になれないで残念です」(北原白秋『雑誌『赤い鳥』を創刊して大正期の童謡運動を牽引』の言葉：5月5日「こどもの日」の朝日新聞・天声人語より)との痛みを忘れずに。